

4-1 asの正体(その1)

— asと品詞の関係

1 asが「～として」となるのは前置詞の場合のみ

高校1年生か2年生あたりに、asの「意味」を尋ねると、ほとんどの場合、「～として」という答えが返ってきます。ただし、「では、『として』以外は?」とさらに聞くと、「それしか知りません」という答えが多いのです。実は、このような「as＝として」のような覚え方が、まさしくasがわからなくなってしまう元凶ともいえるのです。

以下の文では、asが二箇所 で用いられていますが、果たして2つとも「～として」ですますことができるのでしょうか?

- (1) Interpersonal communication has been a growing issue **as**¹ more and more people have turned to social networking **as**² a means of communication.

「人間同士の意思の伝達は、ますます多くの人々が意思伝達的手段としてソーシャルネットワークに頼るようになるにつれ、ますます大きな問題になってきている」

訳文をご覧になればおわかりと思いますが、二箇所に登場するasのうち「～として」と訳すことができるのは、2番目のasの方です。最初のasは訳文にある通り、「～として」ではなく「～するにつれて」という訳語に相当します。このasは接続詞で「同時」を表す用法に分類されます。(この用法については4-8で詳しく扱います)

次の文では、asが三箇所 で使われていますが、「～として」の意味で解すことのできるのは1つだけです。おわかりでしょうか?

- (2) Instead of accepting each other **as**¹ equals on the basis of our common humanity **as**² we might in more equal settings, measuring each other's worth becomes more important **as**³ status differences widen.

「もっと対等の状況にあればそうするように、皆同じ人間なのだからという理由でお互いを対等なものとして受け入れるのではなく、地位の差が拡大するにつれ、互いの価値を測ることがいっそう重要になる」

【注】 on the basis of ～に基づいて setting 状況

この文でも「～として」に相当するのは、最初のas¹だけであり、訳文にあるように、as²は「～ように」、as³は「～するにつれて」に相当します。

では、なぜこのような違いが生じるのでしょうか? asが出たら、やみくもに「として」や「つれて」や「ように」などの訳語を次から次へと当てはめるしかないのでしょうか?

asの訳語を考えるにあたっては、まず品詞を確認する必要があります。例文(2)でいえば、三箇所用いられているasのうち、as¹のみが「前置詞」で、as²とas³はそれぞれ後続にSVを伴う「接続詞」として用いられていることをまずとらえなければなりません。ちなみに、asが「～として」という訳語になるのは前置詞の場合のみです。接続詞のasの場合には、後述するようにさまざまな「訳語」の可能性がありますが、少なくとも接続詞のasが「～として」になることはないのです。

2 品詞を確認しなければasの「訳語」は決まらない

以上でおわかりのように、asの理解には「品詞」の認識がどうしても必要になってきます。

asの品詞の判別基準は以下ようになります。

- ① as の直後が SV ～ (=文) ⇨ 接続詞
 ② as の直後が「名詞」(または「形容詞」)のみ ⇨ 前置詞
 ③ as の直後が「<名詞>が欠落した構造」 ⇨ (疑似) 関係詞
 ④ as ～ as ...の最初の as ⇨ 副詞

以下、具体例をあげましょう。

① 「接続詞」の例: as + SV ～

Use this knife **as I do**. 「私と同じようにこのナイフを使いなさい」

As you grow older, you become wiser.

「人は年をとるにつれ、賢明になるものである」

② 「前置詞」の例: as + 名詞

Karuizawa is famous **as a summer resort**.

「軽井沢は避暑地として有名である」

③ 「関係代名詞」の例: as + 名詞欠落文

As ● is evident from his accent, he is a German.

「なまりからも明らかだが、彼はドイツ人だ」 ⇨ 主語 (●) が欠落

④ 「副詞」の例: as + 形容詞・副詞 + (as ...)

I have never felt **as happy as*** I am now.

「私は今ほどうれしく思ったことはない」 * 2 番目の as は接続詞

as は本来、後続に SV を伴う接続詞です。前置詞の as (②) は接続詞の as のいわば変化形であり、実際 in や on などの純粋な前置詞とは異なる側面があります。それは4-5で扱います。as が後続に名詞(主語か目的語)の欠落した文を伴う場合(③)は「関係代名詞」とされますが、これも which や who などの純粋な関係詞とは異なり、本来の用法である接続詞的な性質が残っています。(よって、正式な関係詞とは言い難い側面があり「疑似関係詞」とも呼ばれます) この用法については5-3で扱います。また比較表現で用いられる as ～ as の最初の as は、～の位置に来る形容詞や副詞を修飾する副詞ですが、この用法には特筆することはほとんどありません。

3 慣用化した表現の品詞分析——場合によっては不毛に

このように as の「品詞」を確認する重要性を説くと、as が登場するたびに as の品詞が気になってしょうがないという方が出てくるかもしれません。ただし、何でもかんでも as の品詞を分類しないと気がすまなくなってしまうのも本末転倒になりかねません。例えば、

(3) There is some doubt **as to** whether he will recover.

「彼が回復するかどうかに関しては疑問が残る」

ここで用いられている as to は2語で「～に関して」という前置詞として働く表現です(群前置詞ともいいます)。as to を1語の前置詞のようにとらえることができれば、それ以上の分類は必要に及びません。次も同様です。

(4) Even in more developed countries **such as** the United States and Europe, the poor die younger than the rich.

「アメリカやヨーロッパのような先進国でさえ、貧困層の方が富裕層よりも早死にする」

A such as B は「A、例えば B」のように、A = 抽象、B = 具体例を示す表現ですが、これも as だけの品詞を追及したところで何も得るものではありません。あくまで such as で1つの語と考えればお終いです。ミイラ取りがミイラになってはいけません。

まとめ

□ as を見たら「品詞」を確認すること

⇨ 「として」となるのは前置詞の場合だけ

ただし、慣用表現の一部となる場合の品詞分析は不要